

ジッドの未完の戯曲『帰宅』：関連未刊資料と校訂版の提示

吉井，亮雄
九州大学：名誉教授

<https://doi.org/10.15017/7329804>

出版情報：Stella. 43, pp.1-42, 2024-12-18. Société de Langue et Littérature Françaises de l' Université du Kyushu

バージョン：

権利関係：



ジッドの未完の戯曲『帰宅』

——関連未刊資料と校訂版の提示——

吉 井 亮 雄

筆者はすでに（なんと 30 年以上も前のこと）、作曲家レイモン・ボヌールとの共作を予定されながらも未完に終わったジッドの戯曲『帰宅（*Le Retour*）』の異文一覧を提示していたが¹⁾、本稿はその改訂版である。旧稿でも作品の生成や内容にかんする補説を添え、数種の刊本をもとに校本を作成していたものの、自筆稿類をはじめとする実証的資料については十分に探索が及ばず、今では少なからぬ不備が目につく研究成果となっていた。ようやく最近いくつかの新資料を確認・参照しえたのを機に、ジッド演劇の再評価にささやかながらでも貢献できればと願い、ここに旧稿を増補改訂する次第である。

それでは校訂版の作成・提示に先立ち、まずは必要に応じて旧稿の記述を再掲しながら、簡略に『帰宅』執筆の経緯と作品の概要を述べておこう²⁾。

『帰宅』執筆の経緯

1899 年 7 月 22 日——。すでに^{ひとつき}一月前からジッドは、母方の別荘があるノルマンディーの小村ラ・ロック・ベニヤールに滞在している。創作に没頭するために、雑事がたえまなくおし寄せる喧噪の首都を離れ、南仏のユゼス（父ポールの故郷）とならんで幼少時からしばしば夏をすごしたこの静かな田舎に籠もっているのである。前夜『カンダウレス王』の第 1 幕を書き上げた彼は、この日には、さらに自分の意欲をかき立てようと、当地での生活態度と仕事の予定について次のように書き記す——

是が非でも生活を変えなければならない。すぐに（ラ・ロックに着くや）努力を始め、上手くいった。以後、刺激物はいっさいなし、食事ではワインは一杯だけ。煙草はほんの少しだけ——ほとんど禁煙。なんとしても五感の平静を獲得すること。外出時は、胸をはって、深く呼吸するよう留意。勤勉に仕事——だが、ひどく困難 […]。とはいえ他人に邪魔をされることはほとんどなかった。[…]

ボヌールのオペラ台本〔『帰宅』〕は急を要しない。なぜなら彼自身がまだ手をつけていない〔作曲を開始していない〕のだから。

小説〔『背徳者』のこと〕, 8月。

『カンダウレス王』の最終部分, 8月-9月。

『法王庁の抜け穴』, 9月。

『プロセルピナ』, 9月。

『ラ・ミヴォア』〔後の『イザベル』〕, 10月。³⁾

各作品の実際の完成年を知る我々の目には、仕事のプランそのものはなんとも無謀なものに映るが、しかし何よりもまず、プランの半数を演劇作品（『帰宅』『カンダウレス王』『プロセルピナ』）が占めていることに注意しよう。1908年初頭に行われた『カンダウレス王』ベルリン公演の惨憺たる失敗以後、ジッドが演劇の実践に対してある種の警戒心を抱き続けたことはよく知られているが⁴⁾、この時期にはそういった意識はまだ希薄なのである。むしろ17世紀の古典主義以来、諸ジャンルのなかで詩とならび演劇を最上位に置いたフランス文学の伝統に無関心でありえたはずのないジッドにとっては、劇作家としても認知されることが密かな願いだったのである。

話題をジッドとしては初めての現代劇『帰宅』に絞ろう。「ボヌールのオペラ台本は急を要しない」——だがジッドは、こう書きとめて8日後の7月30日には早くも「最初の4分の1」の原稿をボヌールに送っている⁵⁾。さらに10月初めには後者がラ・ロックを来訪するが、おそらくはこの訪問にふたたび創作意欲をかきたてられたのだろう、まもなく「2つの補遺」として、物語の主人公と目されるオラスの長台詞^{クアブレ}を書き足している⁶⁾。しかしながら好調のように見えた筆はそこで止まり、以後は如何なる進捗もない。ボヌールの度重なる催促はむしろ逆効果に働き、ジッドは「恥辱と狂気じみた無謀の記念碑として聳え立ち、思考をかき乱すこの不幸な断章」⁷⁾を前にして困惑を覚えるばかりという状態が続いたのである。

ジッドは後年の回想でも、計画が頓挫した原因をボヌールの信奉する美学と彼自身のそれとの根本的な相違に求めているが⁸⁾、両者が初めてこの隔たりをはっきりと意識したのは、当初の執筆から2年を経た1891年8月のことで、『レルミタージュ』誌の同月号にジッドの「芸術の限界」が発表されたのを直接の契機とする。もともとはアンデパンダン展での講演のために準備されたこの

テキストのなかで彼は次のように説いたのである——

芸術作品は意志の仕事であります。芸術作品は理性の所作なのです。〔…〕自然界では〔…〕人間は自然に従属していますが、芸術作品では反対に人間が自然を服従させるのです。——「人間が提出し、神が処理する」と言われますが、これは自然界においては本当です。しかし私が問題にしている対立については、次のように約言しようと思います。芸術作品にあつては、逆に「神が提出し、人が処理する」、と。⁹⁾

ジッドの内部で少なくともすでに数年前から確固たるイメージを結び、また以後もその信条として揺らぐことのなかったこの芸術観の表明に対し、ボヌールはただちに正反対の主張をジッドに書き送る。8月9日の書簡——

私には芸術作品が意志の仕事である、理性の所作である、と信じることはできません。傑作がつねに論理的で調和のとれたもの、そう、丘の稜線や花の造形のように論理的で調和のとれたものだとは私も思いますが、しかし同時にまた、それは意志によるものではない、と思うのです……。したがって、私の考えはほぼ次のようなものと言えるでしょう。つまり、神だけが提出もし、処理もする、ただ彼ひとりが恩寵の偉大な分配者なのだ〔…〕という考えです。¹⁰⁾

事ここに至れば、その後の展開はおのずから早い。3日後ジッドは手紙を返し、相手の考え方を尊重する友愛に満ちた表現を重ねながらも、次のように結論せざるをえない——「かくして私の額とあなたの額がぶつかりあう、ゆゆしき問題点があるというわけです」¹¹⁾。そして月末にはついに共作を最終的に断念する旨を作曲家に通知し、「代わりの台本作者」を探すよう勧めるのである¹²⁾。

このように芸術作品は明晰と意志の結晶たるべしという、しばしば「古典的」と評されるジッドの美学と、刻苦と抑制を排し、自然と本能の躍動に身をゆだねることで、純粋な靈感の定着をめざすボヌールの美学との決定的な乖離によって、計画の流産は当初から予告されていたとも言えるだろう。付言するならば、フランシス・ジャムが背後でこの一件に大きな影響を及ぼしていたことも疑えまい。かつてジッドがボヌールを識ったのがこの詩人の仲介によるものだったばかりか、彼と詩人とのあいだには、音楽家との場合と同種の芸術上の意見対立が以前から露呈しており、そのことが『帰宅』の中断・放棄と無関係だったとは思われないからである。じじつ、すでに前年（1900年）には、ジッド宅での会食において、「彼の詩句には曲を付けようがないとボヌールは私に

語った」とジャムが発言し、「苦々しい思いを抱き、〈靈感〉なるものに若干の嫌悪を覚えた」ジッドがこの問題をボヌール自身に知らせるという一幕があった¹³⁾。また、ジャム当人とあのいだの意見対立がそれまでに深く深刻な様相を呈するのも、『帰宅』が最終的に放棄された3カ月後(11月25日)には完成し、翌1902年5月に出版される『背徳者』の主題をめぐってのことである¹⁴⁾。

さて話は前後するが、『帰宅』の共同制作については、刊本冒頭に付された後年の回想「レイモン・ボヌール」にも明記されているように¹⁵⁾、まず作曲家が具体的なプランを示し、ジッドはそのリブレットに沿って戯曲の第1幕にあたる「最初の4分の1」(上述のように1899年7月末に作曲家に送られた原稿)を執筆した。このこと自体に疑念の余地はない。だが実際にはそれが創作作業のすべてだったわけではない。当該稿に先立ちジッドは、題名こそ同一ながら、内容・時代設定ともに異なる4幕劇の素描^{もの}を物していたのである〔図版1〕¹⁶⁾。

計22葉の小型紙片に青色インク・ペン書きで記された素描は、最初のやや大きめな2葉に第1幕4場分の概要が示された後、第3葉に第2幕のそれが数行のみ。続く10葉(実質的には6葉分)が第3幕の粗筋に当てられ、第4幕は主要登場人物の王子とオラシオ(英語読みホレイション)の対話が1葉・10行ほど、と内容・分量ともに相当のバラツキがある。また残り8葉の記述は会話の断片などで、各葉の記述量はいずれもわずかである。というわけで具体的な全体像は必ずしも明確ではないが、参考までに冒頭2葉の記述を原文で引いておこう(オラシオの綴りは Horatio / Horation の2つが混在)――

Sc. I

On compte des étoffes - habits, vêtements à emporter. Impedimenta.

Sc. II

Arrivée des ministres. Ce qu'ils veulent c'est entasser les scrupules pour empêcher le prince d'agir. On lâche sur lui la meute des conseillers. - Qu'est-ce qui peut l'avoir fait songer au voyage ? Horatio - l'envoyer en mission au loin - etc - (P. et H. arrivent.)

Sc. III

Conseils - médecin - (saison pas encore assez chaude pour voyager) Prince - Horation - les conseillers. - Le prêtre (deuil pas terminé, - dévotions indispensables pour les tombes) - Ministre de la misère publique (pauvres qui ne seront plus secourus, etc) (ne pas songer à soi - « mais à qui donc voulez-vous que je songe ? » - À tous - à Dieu, Seigneur. Croyez-vous qu'aucun de nous - (morale))

Le Retour -

- Sc. I On compte des étoffes - habits, vêtements à emporter. Impedimenta.
- Sc. II Arrivée des ministres. Ce qu'ils veulent c'est entraver les comptes pour empêcher le prince d'agir. On lâche sur lui la meute des conseillers. — Qu'est ce qui peut l'avoir fait rompre au voyage? Horatio — l'envoyer aux missions au loin - etc. (P. est harcelé).
- Sc. III Conseils: naïvete - (raison pas encore essayée chaude pour voyager) Prince - Horatio - les conseillers - - le prêtre (deuil pas terminé, - dévotions indispensables pour les tombes) - Ministre de la misère publique (pauvres qui ne servent plus secours, etc) (ne pas manger à soi - "mais à qui donc vaalez vous que j'a soupe?" - et tous - à Dieu, Seigneur. Croyez vous en aucun de vous - (morale))
- Epouette (vêtements à emporter - carottes commémoratives de tous les grands deuil de la famille - pots du passé) - dépenses - que le

图版 1 :

Notes préparatoires pour la première version du *Retour*
(Fondation Catherine Gide, Paris), f° 1 r°.

Étiquette (vêtements à emporter - carrosses commémoratifs de tous les grands deuils de la famille - poids du passé) - dépenses - que le ministre des finances déclare impossibles.

Le conseiller des formalités dit « moi je veux bien - qu'on pense le ministre des finances - Le ministre des finances veut bien - à condition qu'on prenne moins de choses. - Dilemme - Il faut que les dépenses d'agir se fassent seulement dans la tête du prince.

Sc. IV

Le prince est parti avec les conseillers et les ministres. Horatio reste seul avec Cardénio. Horatio explique ce qu'il veut - grande amitié pour le prince - explications psychologiques. Le prince - exquise nature, toute virtuelle - la faire éclore - oppression des éducations - impossibilité de vouloir - « au lieu d'un révolté on en a fait un obéissant », impossibilité de vivre dans une atmosphère aussi pesante. Le faire sortir de là - Lâcher tout subitement - laisser les ministres s'entremanger dans son absence - Se marier - lever le peuple de l'autre roi - et reconquérir son propre royaume avec un peu de sang versé pour se distraire.

この4幕劇の準備ノートは、ボヌールによるもうひとつ別のプランに従ったもののなのか、あるいは元々ジッド自身が抱いていた構想のメモなのか。前後の経緯から見て、筆者としては後者の蓋然性を採りたいところだが、決定的な資料・証言を欠く現状では軽々には断じがたい。だが後述するように、王子やオラシオらが登場するいかにもシェイクスピア風の古典劇から、現代が舞台の家庭劇への変更によって、結果的にジッドが彼なりの心理的な拘り^{こだわ}を作中に投影し易くなっていたことだけは確かである。なお、王子の出立をめぐる記述が物語の起点をなしていることを鑑みれば、表題の *Le Retour* は「帰宅」ではなく、たとえば「帰還」とでも訳すべきところであろう。

『帰宅』の梗概と作品の位置づけ

さて、結局は放擲された『帰宅』（第1幕）の主題がすぐれてジッド的なものの、作家の自伝的要素を濃厚に反映するものであったことは間違いない。簡略な内容紹介もかねて、そこに提示されたいくつかのテーマを指摘しておこう。

オラスは、遠くアスワンの地で3年をすごしたのち約束どおり、貞淑な妻マルトの待つ田舎の家に帰ってくる。彼女は、別離の夜と「同じ灰色のドレスと同じ想いで」彼を迎える[27. 以下、引用の出処は稿末に掲げる校訂版の頁数]。しかしオラスの目には、久方ぶりの家は必ずしもかつてと同じには映らない――

いや、なにもかもまったく同じままだよ、君だって同じままだ。
でも僕の目は同じままだじゃないようだ。
居間がこんなに小さいとは思わなかった。[32]

「長いあいだ酔い痴れていたおとぎ話のような夢から目覚め」、ふたたび「平安が魅せられた心の上におりてきた」ことを喜びながらも[37]、そこには漠然とした不安が、もはや以前のような二人の関係を許さない不安が隠されている——「この旅で僕は粗野で荒々しくなったのじゃないだろうか」[39]。そして実際、雨中の帰宅のせいで額に熱をもったオラスを案じながら、旅先では熱病にかかることはなかったかと問うマルトに対して、彼の返答は無邪気だが、それだけによけい残酷なものとなる——

アスワンで熱病だって!? 君には分かっていないんだ!
あれほど健康な土地はない。
どんな病氣も癒ってしまう、空はいつも晴れて、
冬を感じることもほとんどない。
あちらにいるときほど元気だったことは一度もない。
僕は太陽をおいてきた、ここにあるのは雨だ。
ここでは僕は病氣になってしまう…… [33]

家庭の閉塞を嫌い、灼熱の太陽を求めて絶え間なく出立と帰宅を繰り返したジッドと、いつも地味な衣服に身を包み、パリにはめったに姿を見せず、雨の多いノルマンディーのキュヴェルヴィルで彼の帰りを待った控えめなマドレーヌとの関係をここに見ない者はあるまい。オラスの何気ないことばに潜む残酷さも、ジッド自身の公認されえない欲望のカタルシスという点で、少年との戯れのために図らずも妻を見殺しにする『背徳者』の主人公ミシェルの残酷さと通底しているのである。とりわけ引用最終行の台詞「ここでは僕は病氣になってしまう」は、およそ20年後（1918年6月18日）、ジッドがキュヴェルヴィルを逃れ、青年マルク・アレグレとイギリスに向けて旅立つまさにその日、マドレーヌに宛てて「ここにいたら僕は腐ってしまう」¹⁷⁾と書き残すことになるのを、時早くも予告しているかの如し。

ドラマの展開をうながす動因という面で、オラスとマルトのあいだに生じた微妙な亀裂に劣らず注目すべきは、マルトの妹リュシルの存在とそれが夫妻の関係に投げかける不安な影であろう。「愛らしさにあふれる、若い笑い声」をも

つ彼女は、万事に積極的で、オラスとの再会が「いたって簡素で、静かな、意表をつくのはなにもない」[27] ようにと願うマルトに対しても自分の考えを隠さなかった――

あら、私だったら夫を待つのにもっと華やいだドレスにしようわ。
 なにもかも変えてしまうの、お顔も、髪も。
 私の心と眼差しに昨日の忘却を読みとって、
 彼は新妻に会うような気がするでしょう。
 そして、愛にあふれて、ずっと若々しい陽気な声で言うのよ
 ああ！ 妻がこんなにも美しいとは知らなかった！ [27]

だが、この勧めはむしろマルトの心を深く沈ませる――「でも、そんなことができるほど／私はもう若くなければ／美しくもない、私があの一とにできるのは／ただ貞節であることだけ」[27-28]。リュシルの存在が物語全体の構想において小さからぬ位置を占めていたと推測されるのは、単にマルトとの性格の違いや年齢差のためばかりではない。オラスが実際に帰宅すると、それまでの陽気さとは打って変わり、泣きながら2階に駆け上ってしまう彼女の態度には、秘められた愛情の暗示、あるいはある種の共犯関係のそれを読めなくはないからである。オラスの方はとくにこれを意識している様子は見せないが、それでも第1幕の終わりでは、彼が義妹のためにアスワンから「狭い籠に入れて、島に棲む黄と黒の小さなリス」を送っていたことが、彼女だけに「小声で」告げられる[41]。描写はあくまでも^{はの}仄めかしにとどまってはいるが、オラスとマルトの関係がジッドの自伝的要素のほとんど忠実な転移であることを思えば、リュシルについても実在の人物の反映を求めることはあながち根拠のないことでもあるまい。というのは、マドレーヌの妹のひとりヴァランチヌが、リュシルのように姉とは対照的に活発で、しばしば衝動的な言動を見せたことで知られているからである。彼女をモデルにした、きわめて実話性の高い物語『マネ・テケル・ファレス』で、主人公にやはりリュシルなる名が与えられていることも単なる偶然とは思われない¹⁸⁾。また、これに類似する三者関係の転移として、『狭き門』(1909年)のアリサ、ジェローム、そしてアリサの妹ジュリエットのそれを思い浮かべるならば、なおさら登場人物リュシルの生成に作家の自伝的要素が大きく介在したことは疑えまい。

以上のように、ジッドとマドレーヌの両義的な夫婦関係が物語の自伝的な粹

組みの中心に置かれている点で、『帰宅』は明らかに『背徳者』や『狭き門』の系列に位置づけられる作品である。しかしながら第1幕の〈帰宅〉は新たな〈出立〉の準備・前提にすぎない、と第2幕以降の内容をあえて推測するならば、『帰宅』がそのありうべき展開においてすでに、少年たちを主人公とするいくつかの作品、具体的には末弟の新たな旅立ちによって救済への期待が美しく素描される『放蕩息子の帰宅』（1907年）や、世代間格差の問題を背景に、はるかに大きな時空の広がりの中かで「閉塞」と「解放」の対立を描く『法王庁の抜け穴』（1914年）および『贋金つかい』（1926年）といった作品を予告するものであったとも言えるのではあるまいか。

たしかに冒頭部のみで執筆を放棄された『帰宅』は、関連情報に乏しいという事情も相俟って、挿話的な価値しか持たぬ作品と見なされ、今日まで本格的な論議の対象になったことがない。しかしながらジッドが自らの立ち位置を測るために他者、とりわけ意見の異なる他者をつねに必要としたことは、ボヌール宛書簡にも述べられているとおりである¹⁹⁾。この意味で『帰宅』は、未完に終わったというまさにその点において、作家の芸術上の信念を逆の面からさらに確固たるものにし、途中数年にわたる執筆不能時期を挟みながらも、『狭き門』以降の豊かで着実な創作活動を準備するのにながしかの貢献をした、そう推し量るならば、この小品をあまりにも過大に評価することになるのだろうか。

自筆原稿 / 刊本 / 校正刷

校訂版の作成・提示にあたり、新たに筆者が参照することのできた自筆原稿、違法刊本を含む印刷テキスト3種、そのうち初版用に準備・使用された校正刷（自筆修正入り）の各々について、以下に関連未刊資料の紹介をまじえながら若干の実証的説明を加えておこう。

1. 自筆原稿

後述するように『帰宅』の自筆原稿は1899年以降永らくレイモン・ボヌールの手元にあったが、1932年にジッドに返され、彼の没後は実子カトリーヌ・ジッド夫人宅に保存されていた。その後、文芸メセナとして著名なアンヌ・グリュネル・シュランベルジェ（『新フランス評論』を共同創刊したジッドの盟友ジャン・シュランベルジェの姪）に委譲され、現在は彼女が南仏ヴァール県

トゥールトゥールに設立したレ・トレイユ財団に保管されている〔図版2〕。

その形状や分量、記述の概要に触れておくと、原稿は比較的小型の二折用紙20葉。各葉の表面^{おもて}を使用した黒色インク・ペン書きの本文は、所々に小さな修正・加筆が認められ、2カ所で青鉛筆の※印による数行分の差し替え指示があるものの、全体として記述にはほぼ途切れがない。このことから判断するに、下書きが存在した蓋然性はきわめて高い。なお冒頭には、明らかに旧作入手後にジッド自身が書いたメモが付されている——曰く、「レイモン・ボヌールが提案したテーマに沿って、彼のために書かれた《オペラ・コミック》のテキスト。楽譜はほとんどすべて完成していたと思う」²⁰⁾。また原稿最終葉の末尾には作家の署名があるが、字体形状からみて明らかに1930年代以降の書き入れである。

少なからぬ句読法の異同や若干数の小さな削除・訂正はひとまず置き、この自筆原稿が後の初版テキストと異なる点として特に注目に値するのは、①表題(表題紙)が付されていない、②登場人物のひとりが「祖父」ではなく、しばしば「老人」とされている、③ホラスの旅先が「アスワン」ではなく「ミクロン」だったことで、これらはいずれも次節で述べる違法刊本『あるオペラの断章』の特徴でもある。

ジッドは1932年11月、久方ぶりにボヌールと連絡を取っていた。すでに『帰宅』の初版(1946年刊)には作曲家宛の書簡群(1925年11月までの書簡69通、および1938年4月の電報1通)が附載されているが、この時に送られた2通は今まで一般には知られていなかった未刊書簡で、そこには作品の自筆原稿が永らくボヌールの手元に置かれていたこと、同年に刊行・配本が始まる NRF 版『全集』の準備のためだったのか、ジッドの方から旧作の借り受けを望んだことが具体的に記されているのである。まずはその第1信——

《ジッドのボヌール宛書簡1》²¹⁾

7区ヴァノー通り、1番地^{ビズ}
LITTRÉ 57-19

〔パリ、19〕32年11月8日〔火曜〕

親愛なる昨日の友

私たちのあいだのかくも長き無沙汰……。遺憾にも身勝手な理由なだけに、なんともお手紙を差し上げかねるところですが、その理由を申し上げれば——

あなたが私に題材を提供してくださり、音楽を付け始めておられたあの家族劇のテキストを保存しておいででしょうか……。あれから何と長い時が経ったことか！ 私は写しを取っておきませんでしたし、はっきりした記憶さえありません。今日読み

Marthe (touchant de sa main le front d'Horace)
 Comme ton front est chaud !
 Tu n'as pas pris la fièvre, au moins, là-bas ?

Horace
 La fièvre à (Miquelon) ! ? Mais tu n'y es pas !
~~On y~~ Il n'y a pas de terre plus saine.
 On y guérit de tout ; le ciel est toujours beau ;
 Et l'on y sent l'hiver à peine.
 Jamais je ne me suis mieux porté que là-bas.

J'ai laissé le soleil ; je trouve ici la pluie.
 C'est ici que je suis tombé malade....

Marthe
 O ! ne dis pas cela ! Malade... ? près de moi !

Horace
 Parbleu non ! -

Le Vicaire
 Et tout va bien, là-bas ?

图版 2 :

Manuscrit autographe du premier acte du *Retour*
 (Fondation des Treilles, Tourtour), f° 11 r°.

返してみれば、そのテキストは私にとっては非常に色褪せて見えるものかも知れません。ですが、もう一度目を通してみたいと思うのです。もし簡単に見つけられるようであれば、お送りいただければ有難く存じます。

沈黙と距離にもかかわらず、私があなたに対して変わることなき想いと、愛情こもる優しい気持ちを抱いていることをお信じあれ。忘れがたくあなたの

アンドレ・ジッド

第2段落中の「家庭劇のテキストの写しは取っておかなかった」との文言から、1899年時点でボヌールに送られていたのが自筆原稿であることは疑えない。作曲家の11月11日付返信（ジャック・ドゥーセ文庫所蔵）²²⁾は残念ながら未見だが、ジッドの依頼を快く了承したその内容は文通者の第2信からおおむね窺い知れる――

《ジッドのボヌール宛書簡2》²³⁾

LITTRÉ 57-19

〔パリ、19〕32年11月18日〔金曜〕

親愛なる友

私の原稿に添えてくださった魅力的なお手紙（早速ご返信いただき有難うございます）には言葉にならぬほど感激いたしました。そして目に涙を浮かべてお手紙を読みながら、あなたに対する私の友情がどれほど強いものであったのかを感じ入っていました。それだけに、いつかあなたがパリにお寄りになるさいに拙宅の呼び鈴を鳴らしてくだされば、どんなに嬉しいことでしょう！ 慌ただしい生活を送っているとはいえ、ときおりひどく孤独を感じてしまいます。〔それだけに〕いくつかの過去の交情は何ものにも代えがたいものでしたし、そのことは〔今なお〕変わりようがありません。

というわけで、原稿の写しを取らせましたが、率直に申し上げて、それを再読するのは楽しく、記憶していたよりも出来の良いものに思えました。たとえ単なる思い出の品としてであれ、あなたがこの原稿に感傷的な価値を寄せてくださるならば、ご返送いたす所存です。

心をこめてあなたを抱擁します。

アンドレ・ジッド

当該稿が以後ジッドの手元に残ったことから、ボヌールがその返却を求めなかったことも明らか²⁴⁾。またこの時ジッドが取らせた「写し」とは、保存・所在は未確認ながら、まず間違いなく当時の女性秘書マドレーヌ・エプロンに命じて作成させたタイプ稿である²⁵⁾。なお、旧作を再読し「記憶していたよりも出来が良い」と喜んだにもかかわらず、第1幕のみの未完作であることが理由だったのか、結果的にジッドは『全集』での収録を見送っており、公刊は14年後のイド・エ・カランド社単行版を俟つことになる。

2. 『あるオペラの断章』

『帰宅』にかんしては、後述のように初版・『演劇全集』版という2つの公刊テキストが知られているが、じつはその外にもうひとつ、初版出版の2カ月前にごく少少数印刷された「違法刊本」が存在するのである。『あるオペラの断章』と題されたこの版本については、ジャック・コトナンのジッド書誌が伝聞情報としてその存在を指摘しているだけで²⁶⁾、詳細は筆者が旧稿で言及するまで一度も論じられたことがなかった。だが同版はある「未発表原稿」を元にしたもので、公刊版に対し少なからぬ異文を含む点でも小さからぬ資料的価値を有しているのである。

まず、その書誌的な側面を簡略に記すと――。ジョアノ紙をもちいて印刷された大版8折サイズで、仮綴はされず各紙片バラバラの状態である（装丁の便のためにしばしば贅沢版で採られる方法）。仮題を冠した表題紙に続き、「本巻は作者の了解をえずに正真正銘7部のみ刷られたもので、アンドレ・ジッドの未発表原稿のテキスト (le texte d'un manuscrit inédit d'André Gide) を写すものなり。1946年8月刷了」と、部数表示とともに、わざわざ違法出版である旨が記されている（なお筆者が参照したのはバリ国立図書館貴重本室に現蔵の第6番刊本）。本文テキストは頁付なしの16頁、価格表示はむろんない。その違法性に対する配慮のためか、筆者の知るかぎり、この刊本が作家の存命中に競売や古書店カタログに現れたことは一度もなかったが、作家の没後、1954年におこなわれたミシェル・ボロレ旧蔵書の売り立てには早くも登場している。ちなみに、そのさい作成された競売目録は同版の印刷・発行地を「バリ」と補足しているが²⁷⁾、なんらかの実証的根拠にもとづいた註記か否かは不明。作家自身が生前この一件を知るに至っていたか否かもまた不明である。

組版・印刷のために用いられた「未発表原稿」にかんしては、誤植によるとは思えないジッド特有の正書法上の誤りや、草稿類においてしばしば認められる書き癖（句読点の欠如や、その代替としてのダッシュなど）ばかりか、前述した現存自筆稿の主要な特徴（本来の表題の欠如や登場人物名の不統一、オラスの旅先の異同）を備えていることから、1899年当時の状態を反映したものであるのは疑えない。ただし「manuscrit」という記述からだけでは「自筆原稿」そのものであったとは必ずしも断定できまい。形容辞「autographe」が付されない場合には時として「タイプ稿」のこともありうるからだ。仮にタイプ稿で

あったとすれば、1932年に作成されていたものが無断で使用されたということになろうか（付言すれば、当該刊本にはごく少数ながら現存自筆稿のテキストには対応しない独自の異文が存在している²⁸⁾）。

3. 初版とその校正刷（初校）

同年10月には、ヌーシャテルに本拠をおくイド・エ・カランドから『帰宅』の初版が、同年6月執筆の回想「レイモン・ボヌール」と作曲家宛の書簡群を付して公刊される。リシャル・エイドが友人フレート・ウーラーとともに興したイド・エ・カランドは、すぐれた印刷・造本のゆえに晩年のジッドがとりわけ^{ひいき}最^き真^まにした出版社で、ここからは『帰宅』の前年には『青春』が、翌年以降は『テーゼ』第2版、『ポエティック』『序言集』『交遊録』『エロージュ』や次節で触れる『演劇全集』全8巻、またマドレーヌとの関係を赤裸々に綴った『今や彼女は汝のなかにあり』の私家版などが、わずか数年のあいだに立て続けに上梓されている。この間ジッドは、エイドと職業上の肩書をこえた親交を結び、46年と翌47年にはヌーシャテルを訪れ、彼の自宅に長逗留をしたほどであった。

『帰宅』初版の成り立ちを探るため、まずは最近筆者が存在を確認した校正刷の概要を略記し、次いでその元となったテキストについて若干の私見を添えることにしよう——。当該校正刷（個人蔵）は縦23.5×横16センチの19葉（頁付は第1葉の表題紙が手書きで17と打たれ、以下は活字組みの19から36）から成るが〔図版3〕、第一に指摘しておくべきは、公刊テキストに対する異文がなおもいくつか未修正のまま残ることから²⁹⁾、これが明らかに「初校」だという点である（表題紙の上端には赤鉛筆で大きく《I》と打たれているが、このことも再校の存在を強く示唆しよう）。基本的にジッドによる修正はまず黒色インク・ペン書きで、次いで赤鉛筆をもちいて行われ、句読法を中心に文体上・韻律上の要請によるもの、詩行の配置にかんするもの（センタリングや右寄せ、上下詩行の連続的配置など）が大半で、後半の4頁ほどに数行分のペン書きの変更・加筆が認められるものの、物語の主題提示に影響を及ぼすようなものは皆無といって差し支えない。

当該校正刷が作家の手に残った事実を思えば、修正箇所を自身の目で確認し、さらに追加の修正を施せるようにと、それが新たに出来た再校と合わせて彼

L E R E T O U R

La paix descend enfin sur mon âme ravie...
 Du songe fabuleux dont je fus longtemps ivre
 Voici que je m'éveille et que je vais revivre.
 Oubliant les trois ans loin de vous écoulés
 Je reprends notre amour comme on reprend un livre
 A la page où l'on est resté.

~~Livre charmant~~ ~~livre charmant~~ de notre vie

Marthe, t'en souviens-tu? Dès ~~les~~ premières pages

Notre amour ~~qu~~ a doré les feuillets.

Aussi loin que j'y lis je revois ton image

Me sourire du fond du passé.

Je revois les grands yeux de la petite fille

Dont le regard charmant, souriant et tranquille

Se reflétait au cœur du petit garçon que j'étais

Marthe! te souviens-tu, comme nous étions sages?

Toi dans ta robe bleue et blanche

Moi dans ma veste du dimanche

Que nous avions peur d'abîmer...

Marthe! Te souviens-tu de tes premières larmes

Quand, un soir que grand-père eut conté son naufrage,

Je t'ai dit : Moi aussi, bientôt, je partirai.

Et tu voulais qu'avant, par notre mariage

Un lien plus puissant sut à toi m'attacher.

Ah! tu vois qu'on revient des plus lointaines plages!

Quand un amour vous guide et ~~bon~~ porte en son cœur

Un souvenir plus fort que tout nouveau bonheur.

Marthe! Je m'en souviens, c'est cette robe grise

Que tu portais le jour où je t'ai dit adieu.

Dis! c'est pour moi que tu l'as mise?

Chère Marthe adorée...

Pourquoi ne dis-tu rien?

図版 3 :

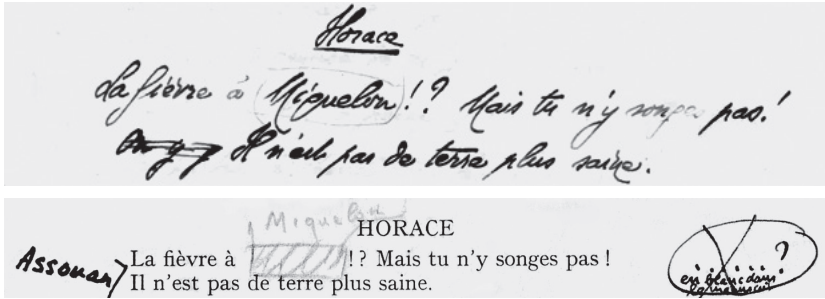
Premier jeu d'épreuves corrigées du *Retour* (coll. particulière), f° 13 r°.

の元に戻されたことはまず疑いを容れまい。ちなみに前々節で触れた自筆原稿に特徴的な登場人物の不整合（「祖父」と「老人」の混在）は初校組版の段階ですでに正されている。

先にも指摘したように、主人公ホラスが3年間を過ごした異国の地は、自筆原稿（および違法刊本『あるオペラの断章』）では「ミクロン」であり、初版の段階で「アスワン」に変更されている。まずはこの2つの滞在先、およびその変更について述べておこう。

ミクロンはアメリカ北部、カナダ・ニューファンドランド島の南に位置するフランス領の群島のひとつ。いっぽうアスワンはエジプト南部ヌビア地方の都市で、きわめて雨の少ない乾燥した居住地である（ナイル川の氾濫防止と灌漑用水の確保のために後年近郊に新規建設されたのがアスワン・ハイ・ダム）。ジッドが前者ミクロン島を訪れたことはなく、また筆者の承知するかぎり、彼の著述にも同地への言及は見当たらない。そのことから判じて、自筆原稿での記述はあくまでもリヴェレスクな異国イメージに基づくものであったと推測される。これに対しアスワンには1946年の1月から2月にかけて、すなわち初版の準備を始めるまさに数カ月前に逗留、オラスと同じく「冬を感じることもなく」[33]大きな喜びを覚えていた——「[すでに1939年2月のエジプト旅行のさいに滞在した]ルクソールと、これまで見知らぬ地であったアスワンでの光溢れる2カ月」³⁰⁾……。はるか半世紀前、作家自身がアルジェリアのビスクラで体験した「蘇生」の記憶と共鳴するがごとく（その体験から生まれたのが『地の糧』であり、『背徳者』であったことは言わずもがな）、分身とも呼ぶべきホラスの自我解放の地として新たにアスワンが選ばれたのはむしろ必然だったのである。

では初校の組版に用いられたテキストとは如何なるものだったのか。14年も前に作成されたタイプ稿がここでそのまま使用されたとはいささか考えにくい、確たる根拠もなくそう断ずることもまた厳に慎むべきであろう。だが容易ならざる使用テキストの特定とは別個に、少なくとも組版・校正作業の一端を示すものとして筆者が注目したいのは、自筆原稿と初校とあいだに認められるごく小さな異同である。再三の言及とはなるが、比較検討の対象はここでもまたオラスが発する次の言葉——「アスワンで熱病だって!? 君には分かっていないんだ! あれほど健康な土地はない」。この箇所を自筆原稿・初校の順に画像で示すと——



自筆原稿では「ミクロン」の語は細い鉛筆書きで枠囲みされている。これは明らかにジッド自身によるもので、当然ながら自筆原稿を入手した1932年、ないしそれ以降の書き込み。ホラスの滞在地ミクロンに対する当時の躊躇を証するものと見なせよう。いっぽう校正刷では当該語の箇所は組版時には空白の状態で残され、そこをジッド自身が赤鉛筆で四角く塗りつぶし、おそらくそれと同時に右欄外にペン書きで「原稿中の空白？ (en blanc dans le manuscrit ?)」と疑問を呈している。その後、最終的にこの註は抹消され、欠落を埋めるべく左欄外に「アスワン」と書き込まれたのである。さらに留意すべきは、空白の上部には青鉛筆でごく薄く「ミクロン」と記されていたことだ。筆跡から見て記入者はまず間違いなく、この1946年の4月からジッドの個人秘書を務めていたイヴォンヌ・ダヴェである。

以上を勘考したうえでの筆者の推測は以下のとおり——。組版に使われたのがダヴェによる新規タイプ稿であったのか、あるいはかつての秘書エプロン作成のものであったのかは不分明ながら、同年4月以降のある時点でジッドから初校中の「空白」(いずれの場合であれ、作家の躊躇を汲んだがゆえの意図的な欠落)について尋ねられたダヴェは、自筆原稿を確認のうえ、問題の箇所の上部に青鉛筆で「ミクロン」と記入する。これによって疑問を解消したジッドは自身の欄外記述を消し、今や望ましき異国の地として「アスワン」を左欄外に加筆する……。タイプ稿の保存・所在が未確認である現状では上述の内容はあくまで推定・仮説に留まるものの、手持ちの実証的資料から判ずるかぎり、筆者としてはその蓋然性は決して低くないと考える。

なお、刊本の巻頭には象徴派の画家ウージェーヌ・カリエールによるボヌールの肖像が配されている。

4. 第2版（『演劇全集』版）

リシャール・エイドが後に証言するところでは、第2版として『帰宅』が収録された『演劇全集』の計画は元をたどれば彼の発案によるものだった。そのときの二人のやりとりは、ジッドの演劇観や、観客・公衆に対する屈折した感情を伝えるものとしても興味ぶかいので訳出・引用しておこう——

ある朝、朝食をとりながら——朝食の時間がジッドとの議論には適していた——私は彼に、わざと何気ない調子で、あなたの演劇について話してもらえないか、あなたの作品のなかで演劇をどのように位置づけているのかを教えてもらえないかと頼んだ。しばしの沈黙があったので、この頼みが彼の痛いところをついたことが分かった。だがジッドは、いかにその演劇作品に心血を注ぎ込んだかを語ってくれた。数カ月に及ぶ、さらに多くは数年に及ぶ、構想とさまざまな躊躇の期間〔…〕。彼の作品はほとんど上演されていた。だが、たいていは回数も極度に少なく、前衛劇団か素人集団によるものだった〔…〕。結局のところ、彼の演劇作品は大劇場の観衆を獲得することはなかったのだ。そして彼はそのことに対して苦い思いを抱いていた。

彼が私にしてくれていた長い答えがほぼそんなところまできたとき、彼は急に話を切って、私に言った。「そのあとは、ええい、いまいまい、だ！ いつものことだが、公衆というのは後にならなければ理解しないものだ。ところで、あなたはどのようにこんな質問をしたのかね」——私は答えた「〔…〕あなたの『演劇全集』を出版できたらと思っているので。私は断言しようと思うが——そしてその後の手紙のやりとりがそれを証明しているが——この示唆がジッドに非常に大きな喜びをもたらしたと言えると思う。

我々はほとんどすぐに仕事に取りかかった。³¹⁾

エイドの証言にはいつのことかは記されていないが、この話し合いがもたれたのは、ジッドが『帰宅』初版の上梓を間近にひかえヌーシャテルに滞在していた1946年8月末から翌月半ば以外には考えられない。じじつ、時を移さず『演劇全集』の準備が開始されたことを裏づける「その後の手紙のやりとり」も存在する。エイドは全集の各巻に注解を付けることになるのだが、ちょうどこの時期からジッドがそれに必要な情報を彼に送り始めているのである。たとえば、同年10月31日には『放蕩息子の帰宅』を全集に収録するか否かという問いに対する応答³²⁾、また11月18日には私設秘書イヴォンヌ・ダヴェの協力をえて作成した詳細な「ジッド演劇作品のリスト」³³⁾。計画発案の時期と以後の経緯を考慮に入れるならば、ジッドがエイドの提案に即座に同意したのは、『帰宅』初版の出版によって演劇への関心をすでに幾分か呼び覚まされていたため

ではないかとも思われる。ところでジッド自身の準備作業についてエイドは「各作品は執筆年代にしたがって順次ジッドの見直しを受けた。彼がほんの少ししか修正を施さなかったものもあれば、大幅に手直しするものもあった。この仕事は数カ月に及んだ。というのは、劇作家アンドレ・ジッドはこの機会をとらえて、自身の演劇作品の決定版を作ろうとしていたからである」³⁴⁾、そう語っているが、第2巻（1947年10月刷了）収録の『帰宅』第2版テキストにかんしては、修正作業は明らかに証言中の前者に属するもので、約10カ所の微細な改変にとどまる。1年前に公刊された初版テキストの踏襲がジッドの基本方針であったことは疑えない。なお、テキスト冒頭をモーリス・ブリアンションによる多色刷石版画が飾る。

＊

最後に底本 (texte de base) の選択について一言——。稿末掲載の校訂版の作成・提示にあたっては初版テキストを底本とした。ジッドが手を入れた最終版としては翌年刊の『演劇全集』版がそれに当たるが、上述のように同版での修正は少数かつ微細であること、合本ゆえの表記改変があること（たとえば「幕」や「場」の表記統一）などからこれを採らず、初版テキストを本文に置くことで自筆修正入り校正刷との連続性を視覚的に画然たるものにすることを優先した。

註

- 1) 拙稿「アンドレ・ジッドの『帰宅』——校訂版作成のための覚え書——」、『文学研究』第89号、九州大学文学部、1992年3月、55-89頁。
- 2) 小説や批評・日記・自伝といった著作に比べると、ジッドの演劇作品の認知度はそれほど高くはあるまい。その晩年には全8巻の『演劇全集』が出版されていたほどで、作品数はむしろ多いとも言えるのに、一般には今でも劇作家ジッドというイメージは馴染みが薄い。かつては研究者さえも「ジッドと演劇」を進んで論じようとはせず、この主題を扱った研究としては、それじたい議論の余地を多分に残すジェイムズ・マクラレンの単行書くらいしか存在していなかったのである (voir James C. McLAREN, *The Theatre of André Gide. Evolution of a Moral Philosopher*, Baltimore: The Johns Hopkins Press, 1953)。だが近年は、ジッドの総体像把握のためには等閑視できぬ作品群として、とみにその重要性が認識され始めている。とりわけ1992年にジャン・クロードが多年の研究の成果として大著『アンドレ・ジッドと演劇』を公刊したこと、また2009年刊のプレイアド新版『作品集』（2巻）に『帰

- 宅』を含め、すべての劇作が何らかのかたちで収録されたことの意義は大きい (voir Jean CLAUDE, *André Gide et le Théâtre*, 2 vol., Paris : Gallimard, coll. « Cahiers André Gide » n^{os} 15 et 16, 1992 ; André GIDE, *Romans et récits. Œuvres lyriques et dramatiques*, 2 vol. Édition publiée sous la direction de Pierre MASSON, Paris : Gallimard, coll. « Bibliothèque de la Pléiade », 2009)。さらに現在はヴィンチェンツォ・マッツァの編纂・校訂による新たな『演劇全集』の準備が進行中で、すでにその第1巻が公刊されている (voir André GIDE, *Théâtre complet*, t. I. Édition critique par Vincenzo MAZZA, Paris : Classiques Garnier, coll. « Bibliothèque gidienne », 2024)。
- 3) André GIDE, *De me ipse et aliis*, dossier de notes fragmentairement reproduit par Claude MARTIN, *La Maturité d'André Gide. De "Paludes" à "L'Immoraliste" (1895-1902)*, Paris : Klincksieck, 1977, pp. 387-388.
 - 4) À ce sujet, voir notamment Claude MARTIN, « Gide 1907 ou Galatée s'apprivoise », *Revue d'Histoire littéraire de la France*, 70^e année, n^o 2, mars-avril 1970, pp. 196-208.
 - 5) Voir la lettre de Gide à Raymond Bonheur, « La Roque Baignard, [30 juillet 1899] », reproduite in André GIDE, *Le Retour*, Neuchâtel / Paris : Ides et Calendes, 1946, p. 49.
 - 6) Voir la lettre de Gide au même, « Lamalou-le-Haut, [19 octobre 1899] », *ibid.*, p. 51. Mais dans le texte du *Retour*, on ne lit qu'une seule longue tirade d'Horace (voir Claude MARTIN, *La Maturité d'André Gide*, *op. cit.*, p. 390, note 70)...
 - 7) Lettre de Gide au même, « Cuverville, 10 mai [1903] », *ibid.*, p. 75.
 - 8) Voir André GIDE, « Raymond Bonheur », *ibid.*, pp. 11-16.
 - 9) André GIDE, « Les Limites de l'Art » (*L'Ermitage*, n^o d'août 1901), texte repris dans les *Prétextes* (éd. 1963), Paris : Mercure de France, p. 26.
 - 10) Lettre de Bonheur à Gide, « Magny-les-Hameaux, [9 août 1901] », reproduite par Claude MARTIN, *La Maturité d'André Gide*, *op. cit.*, p. 392.
 - 11) Lettre de Gide à Bonheur, « Cuverville, [12 août 1901] », *Le Retour*, p. 65.
 - 12) Voir la lettre de Gide au même, « Cuverville, 30 août [1901] », *ibid.*, p. 67.
 - 13) Voir la lettre de Gide au même, « Lamalou-le-Haut, 24 octobre [1900] », faussement datée de 1899 dans *Le Retour*, p. 53.
 - 14) À ce sujet, voir notre « Introduction » à l'édition critique du *Retour de l'Enfant prodigue*, Fukuoka : Presses Universitaires du Kyushu, 1992, pp. 36-40.
 - 15) 「以下の頁は未発表であるばかりではない。その受け手たるボヌール自身を別にすれば、私はこれを誰にも読んで聞かせことはないと思う。彼が私に主題を示したうえで音楽を付けるはずだった《オペラ・コミック》のテキストなのである」 (André GIDE, « Raymond Bonheur », *Le Retour*, p. 11)。
 - 16) ジッドが手元に残していたこの準備ノートは現在、2007年設立のカトリース・ジッド財団に保管されている (Fondation Catherine Gide, cote 09-30)。

- 17) Propos de Gide rapporté par Jean SCHLUMBERGER, *Madeleine et André Gide*, Paris : Gallimard, 1956, p. 190.
- 18) Voir André GIDE, «Mané Teckel Pharès», texte reproduit par Claude MARTIN dans sa *Maturité d'André Gide*, *op. cit.*, pp. 585-594.
- 19) Voir la lettre de Gide, du 12 août 1901, déjà mentionnée dans la note 11.
- 20) 同じ旨を述べた前註 15 の引用を参照。
- 21) Lettre de Gide à Bonheur, du 8 novembre 1932, inédite, coll. particulière.
- 22) Lettre de Bonheur à Gide, du 11 novembre 1932, inédite, conservée à la Bibliothèque littéraire Jacques Doucet, cote γ 34-46.
- 23) Lettre de Gide à Bonheur (enveloppe conservée), du 18 novembre 1932, inédite, coll. particulière.
- 24) 返却された原稿には先述の「2つの補遺」(オラスの^{ラフレ}長台詞)は含まれていなかった模様。
- 25) ジッドはまさにこの書簡と同じ日、エプロンに宛てて翌日午後の来訪を乞う旨を書き送っている (voir Madeleine EPRON-DENEGRI, «André Gide dans la vie de tous les jours», *Bulletin des Amis d'André Gide*, n° 158, avril 2008, p. 248)。エプロンは 1931 年から 5 年間, ジッドの私設秘書として原稿・文書類 (特に『全集』版用として『日記』の自筆カイエ) をタイプする仕事を担っていた。なお自筆原稿の返却に代えて, このタイプ稿の副本がボヌールに送られた蓋然性も否定できまい。
- 26) Voir Jacques COTNAM, *Bibliographie chronologique de l'Œuvre d'André Gide (1889-1973)*, Boston : G. K. Hall & C°, 1974, pp. 274-275, item n° 783.
- 27) Voir le catalogue *Œuvres de André Gide provenant de la bibliothèque Michel Bolloré* [vente du jeudi 11 février 1954], Paris : Georges Blaizot, 1954, item n° 91.
- 28) たとえば後掲校訂版 26 頁の註 3, 6 (*FrO*) を参照。
- 29) たとえば後掲校訂版 24 頁の註 4 (*Épr*) を参照。
- 30) Lettre de Gide à Aline Mayrisch, «Beyrouth, le 31 mars 1946», dans leur *Correspondance (1903-1946)*, éd. Pierre MASSON et Cornel MEDER, Paris : Gallimard, coll. «Cahiers André Gide» n° 18, 2003, p. 344.
- 31) Richard HEYD, «André Gide dramaturge», *Revue de Belles-Lettres*, vol. LXXVII, n° 6, novembre-décembre 1952 [parution mars 1953], p. 10.
- 32) Voir la lettre à Heyd, «Paris, le 31 octobre 1946», reproduite dans la *Circulaire* n° 33 du Cercle André Gide, Bruxelles, 20 novembre 1963, puis reprise dans *André Gide et son éditeur suisse. Correspondance avec Richard Heyd (1930-1950)*. Édition établie et présentée par Pierre MASSON et Peter SCHNYDER, Paris : Gallimard, coll. «Cahiers de la NRF», 2022, pp. 79-80.
- 33) Pour les détails de cette liste inédite, voir notre édition critique du *Retour de l'Enfant prodigue*, *op. cit.*, pp. 199-200.
- 34) HEYD, art. cité, pp. 10-11.

Table des sigles

- Ms* : André GIDE, *Le Retour*. Manuscrit autographe du premier acte, [1899]. 20 ff. in-8° non ch. Gide y a ajouté, très probablement en 1932, une petite feuille volante où on lit : « *Texte d'un "opéra comique" écrit pour Raymond Bonheur sur un thème proposé par lui. La [musique] <partition musicale> a, je crois, été presque complètement achevée.* » Coll. Anne Gruner Schlumberger (Fondation des Treilles, Tourtour).
- FrO* : André GIDE, *Fragment d'un opéra*, s. l. [Paris ?], 1946. En feuilles gr. in-8°, 18 pp. non ch., couv. beige rempliée. Ach. d'impr. : août 1946. Au verso de la page de titre, on lit cette note imprimée au-dessus de la justification : « Ce volume, tiré à l'insu de l'auteur à sept exemplaires en tout et pour tout, reproduit le texte d'un manuscrit inédit d'André Gide. » Éd. subreptice.
- Épr* : André GIDE, *Le Retour*. Premier jeu d'épreuves corrigées de l'édition originale, [1946]. En feuilles, 23,5 × 16 cm, 19 ff. ch. (17 et 19-36). Sans ach. d'impr. (Impr. Centrale, Lausanne). Coll. particulière.
- ÉdO* : André GIDE, *Le Retour*, Neuchâtel et Paris : Ides et Calendes, 1946. Portrait de Raymond Bonheur par Eugène CARRIÈRE en frontispice. Un vol. br., 23 × 16 cm, 121 pp., couv. blanche rempliée. Ach. d'impr. : 15 octobre 1946 (Impr. Centrale, Lausanne). Tirage : a - 72 ex. (1 à 60 et I à XII) sur Vergé Guarro. / b - 2.575 ex. (61 à 2.560 et XIII à LXXXVII) sur Vergé crème. Le texte du *Retour*, précédé de six pages de Gide (« Raymond Bonheur », datées de juin 1946) et suivi de ses « Lettres à Raymond Bonheur », occupe les pp. 17-36. Notre texte de base.
- ThC* : André GIDE, *Le Retour*, recueilli au t. II du *Théâtre complet*, Neuchâtel et Paris : Ides et Calendes, 1947. Un vol. br., 23 × 16 cm, 185 pp., couv. blanche rempliée. Ach. d'impr. : 13 octobre 1947 (Paul Attinger, Neuchâtel). Tirage : a - 21 ex. (I à VI et 1 à 15) sur Guarro Molivell. / b - 53 ex. (VII à XIX et 16 à 55) sur Marais. / c - 3.550 ex. (XX à LXIX et 56 à 3.555) sur Vergé crème. Le texte du *Retour* aux pp. 7-26.

Note. - Dans la transcription des variantes autographes (du *Ms* et des *Épr*), nous n'utilisons qu'un petit nombre de signes conventionnels : sont placés entre crochets droits [] les passages, mots et lettres *biffés* par Gide ; entre crochets obliques < > ce qu'il a visiblement *ajouté*, soit au premier jet de sa plume, soit au texte composé. Nous avons également placé entre crochets obliques les mots dont il a changé la place à l'aide d'un signe d'insertion ; précédés d'une croix +, ces mots sont mis à leur nouvelle place, et la place primitive est indiquée par la même croix entre crochets droits [+].

¹ LE RETOUR

1 *Ms : feuillet de titre absent. / FrO : FRAGMENT D'UN OPÉRA (titre évidemment non dû à Gide lui-même) / Épr : au coin supérieur droit, tamponé : LE RETOUR / Imprimerie Centrale Lausanne ; et au-dessous, le chiffre romain I, écrit au crayon rouge de la main de Gide.*

ACTE PREMIER¹SCÈNE PREMIÈRE²LE GRAND-PÈRE, LUCILE,³ MARTHE.

Un vieux salon provincial ; au soir ; Marthe et Lucile brodent sous la lampe.⁴ Des fleurs de printemps sont dans des vases sur une console et sur la table. Dehors pluie et vent.⁵ Au fond à gauche⁶ une fenêtre ; à droite⁷ une porte vitrée donnant sur un perron.⁸ Au bout d'un instant⁹ Marthe se lève, va vers la fenêtre, soulève le rideau et regarde, le front contre la vitre.

LE GRAND-PÈRE¹⁰

Eh bien ?

MARTHE

Non ; rien encor¹¹.

LUCILE

Quel temps fait-il ?

MARTHE

Il pleut.

LE GRAND-PÈRE¹²Le mauvais temps, sans doute¹³

L'a retardé ; la pluie a raviné les routes.

1 Ms : ACTE I / FrO : ligne absente.

2 Ms, FrO, ThC : SCÈNE I

3 Ms : points-virgules. / Épr : virgules changées en points, puis rétablies.

4 Ms, FrO : (à la suite) Le vieillard songe. — / Épr : (à la suite) Le vieillard soupe (sic).

5 FrO : point et tiret.

6 Ms, FrO : fond, à gauche,

7 FrO : virgule.

8 Ms : (à la suite) — [Quand le rideau se lève] / FrO : point et tiret.

9 FrO : virgule.

10 Ms, FrO : LE VIEILLARD

11 Ms : encor[e] / FrO : encore

12 Ms, FrO : LE VIEILLARD

13 FrO : virgule, pas d'alinéa et minuscule.

MARTHE

N'importe...

LE GRAND-PÈRE¹

Il se fait tard.

MARTHE

Rien ne l'empêchera de revenir ce soir.

Il l'a promis...

LUCILE

éclatant de rire

Ah ! ah ! ah ! ah ! quelle assurance !

Tu crois à sa promesse après trois ans d'absence ?²

MARTHE

Après trois ans j'y crois autant qu'au premier jour.

Ma confiance en lui rassure mon amour.³

Sa promesse chantait durant ma solitude.

Je l'entends ; je la sens ; il me la dit toujours.⁴

Ce n'est pas de l'espoir mais de la certitude.

J'attends depuis trois ans... Ô ! belle heure attendue !

Qu'importe ta lenteur, te voici donc venue !

Cher époux !⁵ Maintenant il semble à mon amour

Que ces trois ans d'attente ont passé comme un jour.

Mon âme est un oiseau qu'une aube d'or éveille.

LUCILE

Comme tu parles bien !⁶

LE GRAND-PÈRE

⁷ Ne te moque pas d'elle.

J'aime ton jeune rire où la grâce ruisselle ;

Il émeut de son chant ma maison et mon cœur,

1 Ms, FrO : LE VIEILLARD

2 Ms : *(alinéa)* [Un fiancé, passe encore ! — mais un mari...!!]

3 Ms : *pas de point.* / FrO : *virgule.* / Épr : *point ajouté.*

4 Ms : *pas de point.* / FrO : *virgule.*

5 Ms : [Je revis] <Cher époux> *(en interligne)* ! — / FrO : Cher époux ! —

6 Épr : bien ! [!]

7 Ms : *(Voici le passage rédigé d'abord, puis remplacé, avec un signe de renvoi, par les dix lignes suivantes :) Ne te moque pas d'elle,... (alinéa) Marthe... ma chère enfant (il l'attire et l'embrasse...) (alinéa) J'aime entendre égayer mes dernières années (alinéa) Ta (sic) confiance simple et jamais alarmée*

Mais parfois la joie est cruelle,¹
 Le rire peut blesser.²
 Respecte son bonheur et son amour fidèle :
 Ta sœur est ton aînée.³
 Sa confiance simple et jamais alarmée
 Rassure et refleurit mes dernières années.⁴
 Marthe,⁵ ma chère enfant.⁶

LUCILE
un peu mutinement

Pardon, Marthe ma sœur !
*elle⁷ tend son front à Marthe qui l'embrasse⁸ puis vers le grand-père
 qui lui touche la joue de la main⁹ avec une grande révérence¹⁰*

Pardon, grand-père !

tournée¹¹ vers Marthe¹²
 Alors... ce soir ?...¹³

MARTHE
 Ce soir.

LUCILE
 Pour fêter ce revoir
 Quelle sombre robe as-tu mise !

MARTHE
 C'est celle que j'avais le soir de nos adieux.
 Depuis, je ne l'ai pas remise.
 Il la reconnaîtra ; le revoir que je veux

1 Ms, FrO, Épr : pas de virgule.

2 Ms, Épr : pas de point.

3 FrO : deux lignes suivantes absentes.

4 Ms : point et tiret.

5 Ms : Marthe, — / FrO : — Marthe, / Épr : Marthe [—]<,>

6 FrO : (à la suite, didascalie :) il l'attire et l'embrasse (alinéa) J'aime entendre égayé mes dernières années (alinéa) Ta (sic) confiance simple et jamais alarmée.

7 FrO : majuscule. / Épr : [E]<e>lle

8 FrO : virgule.

9 Ms, FrO : virgule. / Épr : main[.]<,> [A][<a>]vec

10 Ms, FrO : deux-points.

11 FrO : majuscule. / Épr : [T]<t>ournée

12 FrO : deux-points.

13 Ms, Épr : soir !?...

C'est un revoir très simple, et calme¹ et sans surprise.

LUCILE

Es-tu sûre que ce soit le revoir qu'il désire ?

MARTHE

C'est ainsi qu'il m'aimait...²

Il me retrouvera comme il m'avait laissée³

Avec la même robe et la même pensée

Et quand il me dira : qu'as-tu⁴ fait

Durant ce temps si long d'absence, mon amie ?

Je dirai : cher⁵ époux, j'attendais

Pour vivre de nouveau, car vous êtes ma vie.⁶

LUCILE

Eh bien moi⁷ pour l'attendre,⁸

Je crois que je mettrais une robe plus tendre.⁹

Je changerais de tout, de front et de cheveux.

Lisant l'oubli d'hier dans mon cœur et mes yeux,

Il croirait retrouver une femme nouvelle

Et dirait, plein d'amour¹⁰ plus jeune et plus joyeux :

Ah ! je ne savais plus qu'elle était aussi belle !¹¹

MARTHE

très tristement

Mais¹², pour de tels jeux je ne suis¹³

Plus assez jeune

1 *Ms* : revoir [très doux,] très calme / *FrO* : revoir très calme

2 *Ms, FrO* : *points de suspension et tiret.*

3 *Ms, FrO* : *point.*

4 *Ms, Épr* : *majuscule.*

5 *FrO* : *majuscule.*

6 *Ms* : *point et tiret.*

7 *FrO* : *virgule.*

8 *Ms, FrO, Épr* : *pas de virgule.*

9 *Ms, FrO, Épr* : *pas de point.*

10 *FrO* : *virgule.*

11 *Ms* : belle !! — / *Épr* : belle ![!!]

12 *Ms, FrO, Épr* : *Moi,*

13 *Ms* : *et minuscule.* / *FrO* : *pas d'alinéa et minuscule.* / *Épr* : [p]<s>uis (*et minuscule*)

Ni belle et pour lui je ne puis¹
 Qu'être fidèle.

LUCILE

Eh, quoi ! Marthe,² t'ai-je peinée ?

MARTHE

Non, mais je suis ta sœur aînée.

LE GRAND-PÈRE

qui durant toute la scène s'est approché de la fenêtre et surveille

Je crois que je l'entends.³

LUCILE

très excitée

C'est lui ! C'est lui !⁴ C'est lui !

Marthe a bondi vers la véranda⁵ ; le vieillard la suit.

MARTHE

Lucile ! viens-tu...

LUCILE

J'arrive...

*elle⁶ reste seule derrière les autres⁷
 bruits dans la cour*

elle⁸ essaye des fleurs devant une glace

Une rose ?⁹

elle¹⁰ la jette

Un œillet ?

elle¹¹ le jette

Des primevères.

1 Ms : et minuscule. / FrO : pas d'alinéa et minuscule. / Épr : [s]<p>uis (et minuscule)

2 Ms, FrO : Eh ! quoi ? Marthe ! / Épr : Eh [!]<,> quoi [?]<|> Marthe [!]<,>

3 Ms : l'entends !! — / FrO : l'entends ! / Épr : l'entends [!!!]<,>

4 Ms : tiret, phrase suivante absente. / FrO, Épr : phrase suivante absente.

5 FrO, ThC : véranda / Épr : [·]<,>

6 FrO : majuscule. / Épr : [E]<e>lle

7 Ms : tiret. / FrO : point-virgule (sans alinéa) / Épr : <,> (alinéa) [B]ruits ;

8 FrO : point (sans alinéa) et majuscule. / Épr : [E]<e>lle

9 Ms, FrO : rose ?...

10 FrO : majuscule. / Épr : [E]<e>lle

11 FrO : majuscule. / Épr : [E]<e>lle

*elle*¹ *s'en pare*
 Pauvre Marthe !... C'est² mal !
*elle*³ *se penche à la fenêtre*
 Je verrai bien s'il l'aime...
après les avoir vus
⁴ Ah ! tendrement...
*Elle sanglote et s'enfuit.*⁵

1 *FrO* : majuscule. / *Épr* : [E] <e>lle

2 *Ms, FrO* : minuscule.

3 *FrO* : majuscule. / *Épr* : [E] <e>lle

4 *Ms, FrO* : pas de didascalie ; sans alinéa entre les deux phrases. / *Épr* : <Après les avoir vus> (et alinéa inséré ici.)

5 *Ms* : elle sanglote / *FrO* : Elle sanglote. / *Épr* : [E] <e>lle sanglote <et s'enfuit>

SCÈNE DEUXIÈME¹LA SERVANTE, HORACE, MARTHE, LE GRAND-PÈRE.²

*Entrent³ la servante portant la valise d'Horace⁴, puis
Horace au bras de Marthe, puis le grand-père.⁵*

MARTHE
à la servante

Va préparer le thé.

à Horace⁶

Tu dois être transi !

Mon ami ! mon⁷ ami ! te⁸ sens-tu bien, ici ?

HORACE

*laissant rouler sa tête sur l'épaule de Marthe*Ô ! Marthe ! mon amour... mon cœur fond.⁹

MARTHE

Tu n'as pas eu froid ?

HORACE

Non !¹⁰ mais j'apporte l'ondée.

Vois ! mon chapeau ruisselle.

MARTHE
touchant son manteau
Et ta cape est trempée.

1 Ms, FrO, ThC : SCÈNE II

2 Ms : *pas de noms de personnages.* / FrO : HORACE, MARTHE, puis LE VIEILLARD. /
Épr : *virgules changées en points, puis rétablies.*3 Ms, FrO : *Entrent :*4 Ms : *point-virgule.*5 Ms, FrO : *Marthe ; puis le vieillard.* / Épr : *point ajouté.*6 Ms : *pas d'alinéa ici et tiret.* / FrO : *pas d'alinéa ici.* / Épr : [À] <à> *Horace*

7 Épr : [M] <m>on

8 Ms : *tiret et majuscule.* / FrO : *majuscule.*9 Ms : *point et tiret.*

10 Ms : [Ô] non ! —.

Horace se dépouille en riant. Le grand-père¹ prend les vêtements.²

LE GRAND-PÈRE³

à la servante qui est rentrée et dispose une table pour le thé

Rose, fais-les sécher au feu de la cuisine.

Rose sort.⁴

MARTHE

Tu dois être épuisé.⁵

*Ils s'approchent de la lampe. Le grand-père⁶ la soulève
pour éclairer le visage d'Horace.⁷*

LE GRAND-PÈRE⁸

un peu sommairement

Il a très bonne mine.

MARTHE

le faisant s'asseoir près d'elle sur un canapé long

Viens près de moi... tout près,⁹ cher mari retrouvé !

T'y reconnais-tu bien ?¹⁰ Trouves-tu rien changé ?

HORACE

Non ! Tout¹¹ est demeuré bien pareil — et toi-même.¹²

il¹³ regarde longuement autour de lui¹⁴

Marthe suit anxieusement son regard¹⁵

1 Ms, FrO : *Le vieillard*

2 Ms : *pas de point.* / Épr : *point ajouté.*

3 Ms, FrO : LE VIEILLARD

4 Ms : *pas de point.* / Épr : *point ajouté.*

5 FrO : *points de suspension.*

6 Ms, FrO : *Le vieillard*

7 Épr : *point ajouté.*

8 Ms, FrO : LE VIEILLARD

9 Ms, FrO : près — / Épr : près [—] <,>

10 Ms, FrO : bien ? —

11 Ms : Non ! — tout

12 Ms : (*pas de point, et alinéa*) [Aussi, chère Marthe] / FrO : *pas de point.*

13 FrO : *majuscule.* / Épr : [I] <i>l

14 Ms : *tiret.* / FrO : *point.* / Épr : [—] [<:>]

15 FrO : *point.* / Épr : *point ajouté.*

Mais je crois que mon œil n'est pas resté le même¹
Et je ne croyais pas le salon si petit...

MARTHE

d'abord un peu tristement étonnée

Petit !

elle² se reprend, et très doucement³

Quand nous étions enfants⁴, t'en souviens-tu ?⁵
Le soir, il paraissait énorme...

HORACE

Je me souviens de tout,⁶ ô Marthe bien-aimée !
... Mon front sur ton épaule a retrouvé sa place
Et le doux souvenir de ta chaleur...

MARTHE

Horace !

Tu ne t'en iras plus, n'est-ce pas ?

HORACE

en riant

Vous entendez ce que dit Marthe ! Grand-papa !
Au diable le commerce et le voyage !
Je suis comme un vaisseau qu'a fatigué l'orage⁷

il⁸ laisse retomber sa tête sur le sein de Marthe⁹

Voici mon port !¹⁰

MARTHE

touchant de sa main le front d'Horace

Comme ton front est chaud !

Tu n'as pas pris la fièvre, au moins, là-bas ?

1 Ms, FrO : *point*.

2 Ms, FrO : *majuscule*. / Épr : [E]<e>lle

3 Ms, FrO : *deux-points*.

4 Ms : [petits] enfants

5 FrO : *pas d'alinéa et minuscule*.

6 FrO : *virgule et tiret*. / Épr : tout [-]<,>

7 Ms, FrO : *point*.

8 FrO : *majuscule*. / Épr : [I]<i>l

9 FrO : *point*. / Épr : *point ajouté, puis biffé*.

10 Ms : port ! —

HORACE

La fièvre à Assouan¹ !? Mais tu n'y songes pas !
 Il² n'est pas de terre plus saine.
 On y guérit de tout ; le ciel est toujours beau ;
 Et l'on y sent l'hiver à peine.³
 Jamais je ne me suis mieux porté que là-bas.
 J'ai laissé le soleil ; je trouve ici la pluie.⁴
 C'est ici que je vais tomber malade...

MARTHE

Oh !⁵ ne dis pas cela ! Malade ?...⁶ près de moi !

HORACE

Parbleu non !

LE GRAND-PÈRE⁷

Et tout va bien, là-bas ?

HORACE

À merveille !⁸ à merveille !
 La sucrerie⁹ s'étend ; les récoltes sont bonnes¹⁰.
 Le comptoir s'établit ; je suis content des hommes ;
 J'étais fort amusé de m'y faire obéir.
 Que de travail ! à peine y pouvait-on¹¹ suffire !
 Je parlais à cheval tous les jours, dès l'aurore.¹²

1 Ms, FrO : Miquelon (*Dans le Ms, ce mot est encadré au crayon noir ; il s'agit évidemment d'une inscription très postérieure.*) / Épr : <Assouan> (*mot ajouté à un blanc laissé non composé, où la main supposée de Yvonne Davet ajoutait « Miquelon », en interligne au crayon bleu très pâle, et que Gide donnait une note marginale (biffée par la suite) : « en blanc dans le manuscrit ? ».*)

2 Ms : [On y p] Il

3 Ms : pas de point. / Épr : point ajouté.

4 Ms : pas de point. / Épr : point ajouté.

5 Ms, FrO : Ô ! / Épr : O<h> ! [je]

6 Ms : Malade...? / FrO : Malade...? (*et majuscule*)

7 Ms, FrO : LE VIEILLARD

8 FrO : merveille,

9 Ms, Épr : sucrerie (?) (*En marge des Épr, Gide met un point d'interrogation pour cette parenthèse.*)

10 Ms : [belles] <bonnes>

11 Ms, FrO : pouvais-je

12 Ms : pas de point. / FrO : virgule. / Épr : point ajouté.

Parfois je ne rentrais qu'à la nuit...¹

MARTHE

Pauvre ami !

Quel calme reposant² tu vas trouver ici !

Et quel tranquille oubli de ta pénible vie...

HORACE

Pénible ? — Je l'aimais...

N'est-il pas merveilleux³

Que, parti délicat, inquiet, tourmenté⁴,

Je revienne aguerri⁵, plein d'âme et de santé !

N'ai-je pas l'air plus fort, dis ?⁶... Où donc est Lucile ?

Je pensais la trouver ici ?...⁷

Elle n'est plus au couvent, n'est-ce pas ?

MARTHE

Non ; plus depuis deux mois.

à⁸ la servante qui apporte le thé⁹

Rose, tu ne sais pas où peut être Lucile ?

LA SERVANTE

Mademoiselle est montée en pleurant dans sa chambre.

LE GRAND-PÈRE¹⁰ ET MARTHE

En pleurant !¹¹

HORACE

Qu'a-t-elle ?

1 Ms, FrO : nuit, harassé ! / Épr : nuit[, harassé !] <...>

2 Ms, FrO : Quel repos / Épr : (d'abord au crayon, puis à l'encre noire) Quel [repos] <calme reposant>

3 Ms, FrO : C'est une belle chose / Épr : (d'abord au crayon, puis à l'encre noire) [C'est une belle chose] <N'est-il pas merveilleux>

4 Ms, FrO : inquiet, ennuyé

5 Ms, FrO : guéri (Dans le Ms, Gide note en interligne un autre choix : « joyeux ? ») / Épr : [guéri] <aguerri>

6 Ms, FrO : alinéa ici.

7 Ms, FrO : ici...?

8 FrO : majuscule. / Épr : [À] <à>

9 FrO : deux-points.

10 Ms, FrO : LE VIEILLARD

11 Ms, FrO : pleurant !!

MARTHE

Oh ! rien sans doute.¹

Mais ton retour la trouble et l'a mise en déroute.²

³LE GRAND-PÈRE

Cette petite enfant a peur de toi, peut-être.⁴

Elle croit que tu viens pour enlever sa sœur.⁵

Ici, jusqu'à présent, elle a vécu sans maître ;

Nous sommes tous un peu comme ses serviteurs.

Marthe surtout la gâte ; et⁶ c'est notre bonheur

De la voir rire ; mais⁷ elle est délicate encore ;

Tu vois :⁸ pour un rien elle pleure.

Nous l'aimons un peu trop ; et elle le sent, j'en ai peur.

⁹Depuis sa maladie et nos craintes mortelles¹⁰

Chacun, dans la maison,¹¹ ne vit plus¹² que pour elle.

HORACE

Et j'arrive en épouvantail...¹³ Pauvre petite !

1 Ms : Ô rien, je pense — / FrO : Ô rien, je pense. / Épr : O<h> ! rien [je pense] <sans doute.>

2 Ms, FrO : Mais elle est très sensible ; ton retour l'a troublée. / Épr : Mais [elle est très sensible ; ton retour l'a troublée.] <ton retour la trouble et l'a mise en déroute.>

3 Ms : (*Voici le passage rédigé d'abord, puis remplacé, avec un signe de renvoi, par le nom de personnage et les dix lignes suivantes :*) LE VIEILLARD (*alinéa*) Peut-être qu'elle croit que tu lui prends sa sœur (*alinéa*) Et qu'il n'y aura plus ici d'amour pour elle... (*alinéa*) ton retour l'a troublée.

4 Ms : *pas de point.* / FrO : *virgule.* / Épr : *point ajouté.*

5 Ms : *pas de point.* / Épr : *point ajouté.*

6 Ms, FrO : gâte ; mais / Épr : gâte ; [mais] <et>

7 Ms, FrO : rire ; — puis / Épr : rire ; [— puis] <mais>

8 FrO : *virgule.*

9 Ms, FrO : *tiret.*

10 Ms, FrO : *cruelles* / Épr : (*d'abord au crayon, puis à l'encre noire*) [*cruelles*] <mortelles>

11 FrO : *deux virgules absentes.*

12 Ms, FrO : *semble ne vivre* / Épr : (*d'abord au crayon, puis à l'encre noire*) [*semble ne vivre*] <ne vit plus>

13 Ms : Et c'est moi qu'elle craint !! — / FrO : Et c'est moi qu'elle craint ! — / Épr : (*d'abord au crayon, puis à l'encre noire*) Et [c'est moi qu'elle craint !!!] <j'arrive en épouvantail...>

*Marthe se lève et se dirige vers la porte.*¹

LE GRAND-PÈRE²

Reste, Marthe ! J'y vais.³

MARTHE

Fais-la descendre vite.

1 *Ms, FrO : pas de didascalie. / Épr : didascalie ajoutée, sans point.*

2 *Ms, FrO : LE VIEILLARD*

3 *Ms, FrO : Marthe ! — J'y vais...*

SCÈNE TROISIÈME¹*Adagio.*²MARTHE,³ HORACE.

*Marthe s'est rassise*⁴. *Horace est à ses pieds comme un enfant.*
Ils restent quelque temps sans parler.

HORACE

Vous ne dites plus rien ?

MARTHE

Dans un hymne d'amour plus doux que des paroles
 J'entends mon cœur qui pleure et qui vers toi s'envole.

HORACE

Ô ! Marthe,⁵ mon amie
 La paix descend enfin sur mon âme ravie...
 Du songe fabuleux dont je fus⁶ longtemps ivre
 Voici que je m'éveille et que je vais revivre.
 Oubliant les trois ans loin de vous écoulés,⁷
 Je reprends notre amour comme on reprend un livre
 À la page où l'on est resté.

⁸Livre à peine entr'ouvert ; livre de notre vie,

1 *Ms, FrO, ThC* : SCÈNE III

2 *Ms* : *minuscule et pas de point.* / *FrO* : *pas de didascalie.* / *Épr* : *point ajouté.*

3 *Ms, FrO* : MARTHE et HORACE. / *Épr* : *virgule changée en point, puis rétablie ; point ajouté en fin de ligne.*

4 *Ms* : Marthe est assise / *FrO* : Marthe et assise (*sic*) / *Épr* : Marthe <s>est <r>assise

5 *Ms, FrO* : Marthe — / *Épr* : Marthe [—]<,>

6 *Ms* : j'étais

7 *Ms* : *pas de virgule.* / *Épr* : *virgule ajoutée.*

8 *Ms* : (*à la place des trois lignes suivantes* :) Livre charmant (bis !) de notre vie... (*alinéa*) Marthe, t'en souviens-tu ? Dès les premières pages (*alinéa*) Notre amour en a doré les feuillets — / *FrO* : Livre charmant... livre charmant de notre vie... (*alinéa*) Marthe, t'en souviens-tu ? Dès les premières pages (*alinéa*) Notre amour en a doré les feuillets. — / *Épr* : [Livre charmant, livre charmant] <Livre à peine entr'ouvert ; livre> de notre vie [...]<,> (*alinéa*) [+] [Notre] <Dont> amour [en] a doré les feuillets — (*alinéa*) <+ Marthe, t'en souviens-tu ? Dès l[es]<a> première[s]

Dont l'amour a doré les feuillets.
 Marthe,¹ t'en souviens-tu ? Dès la première page,
 Aussi loin que j'y lis,² je revois ton image
 Me sourire au³ fond du passé.⁴
 Je revois les grands yeux de la petite fille
⁵Dont le regard partout me suivait
 Comme s'il cherchait son reflet
 Apaisé dans le cœur de l'enfant que j'étais.
 Marthe ! te souviens-tu, comme nous étions sages ?⁶
 Toi dans ta robe bleue et blanche⁷
 Moi dans ma veste du dimanche⁸
 Que nous avions peur d'abîmer...
 Marthe ! Te souviens-tu de tes premières larmes
 Quand⁹, un soir que grand-père eut conté son naufrage,
 Je t'ai dit : moi¹⁰ aussi, bientôt, je partirai.¹¹
 Et tu voulus qu'avant, par notre mariage,¹²
 Un lien¹³ plus puissant sût à toi m'attacher.¹⁴

page[s]<,>>

1 Ms : Marthe !

2 Ms : je [sais] <lis> (sans virgule) / Épr : virgule ajoutée.

3 Ms, FrO : du / Épr : [d]<a>u

4 FrO : passé !

5 Ms, FrO : (à la place des trois lignes suivantes :) Dont le regard charmant, souriant et tranquille (*alinéa*) Se reflétait au cœur du petit garçon que j'étais. / Épr : [Dont le regard charmant, souriant et tranquille (*alinéa*) Se reflétait au cœur [du petit garçon] <de l'enfant> que j'étais.] (*au verso du feuillet précédent, d'abord au crayon, puis surchargé à l'encre noire*) [Je revois les grands yeux de la petite fille (*alinéa*) Dont le regard partout me suivait (*alinéa*) Comme s'il cherchait son reflet (*alinéa*) Apaisé dans le cœur de l'enfant que j'étais] <Dont le regard partout me suivait (*alinéa*) Comme s'il cherchait son reflet (*alinéa*) Apaisé dans le cœur de l'enfant que j'étais.>

6 FrO : sages ! (*sic*)

7 FrO : virgule.

8 Ms : majuscule.

9 FrO : pas de virgule.

10 Ms, Épr : majuscule.

11 FrO : virgule.

12 Ms, FrO, Épr : pas de virgule.

13 Ms : pour ce mot, une note marginale ajoutée : « 2 syl. » (2 syllabes).

14 Ms : point et tiret.

Ah ! tu vois qu'on revient des plus lointains rivages¹ !
 Quand un amour vous guide et qu'on² porte en son cœur
 Un souvenir plus fort que tout nouveau bonheur.
 Marthe ! Je m'en souviens, c'est cette robe grise
 Que tu portais le jour où je t'ai dit adieu.
³Est-il vrai que, depuis, tu ne l'as plus remise ?
 Pourquoi ne dis-tu rien ?

MARTHE
 Tu parais soucieux ?...⁴

HORACE
 Non ; mais je⁵ crains que ce voyage
 Ne m'ait rendu⁶ farouche et turbulent,⁷
 Tu veilleras⁸ sur moi comme sur un enfant...

MARTHE
 Comme sur un mari, en qui mon âme espère...
 Horace,⁹ lève-toi ! J'entends venir grand-père,¹⁰
 Et Lucile.

1 Ms, FrO : lointaines plages / Épr : (d'abord au crayon, puis à l'encre noire) lointain[e]s
 [plages] <rivages>

2 Épr : et [vous] <qu'on>

3 Ms, FrO : (à la place des deux lignes suivantes :) Dis ! c'est pour moi que tu l'as
 mise ? (alinéa) Chère Marthe adorée... / Épr : [Dis ! c'est pour moi que tu l'as]
 <Est-il vrai que, depuis, tu ne l'a plus re>mise ? (alinéa) [Chère Marthe adorée...]
 <Pourquoi ne dis-tu rien ?>

4 Ms, FrO : soucieux...?

5 Ms, FrO : Marthe... Je / Épr : [Marthe,] <Non ; mais> je

6 Ms : / FrO : laissé / Épr : [laissé] <rendu>

7 Ms : pas de virgule / FrO : point.

8 Ms : — Vous veillerez / FrO : Vous veillerez / Épr : [Vous] <Tu> veiller[ez]<as>

9 Ms : Horace —

10 FrO : pas d'alinéa, et minuscule.

SCÈNE QUATRÈME¹*Mouvement² musical plus rapide.³*

MARTHE, HORACE, LUCILE, LE GRAND-PÈRE

Lucile est blottie⁴ contre le grand-père.⁵

HORACE

Bonsoir⁶ Lucile.⁷

LUCILE

Bonsoir⁸ monsieur.

LE GRAND-PÈRE

Monsieur !?⁹ Mais Horace est ton frère.

HORACE

Bah ! nous serons bien vite amis.

Je vous avais fait peur ?

LUCILE

Ô !¹⁰ non.

HORACE

Pourquoi n'êtes-vous pas restée dans le salon ?

Lucile ne répond rien¹¹ mais reste blottie¹² contre l'épaule du grand-père.¹³

1 Ms, FrO, ThC : SCÈNE IV

2 Ms : minuscule.

3 Ms : beaucoup plus rapide (pas de point) / FrO : beaucoup plus rapide. / Épr : point ajouté. / ThC : pas de didascalie.

4 Ms : LES PRÉCÉDENTS + LUCILE (alinéa) blotie (sic) / FrO : LES PRÉCÉDENTS, plus LUCILE (alinéa) blottie / Épr : virgules changées en points, puis rétablies.

5 Ms, FrO : contre grand-père. / Épr : point ajouté.

6 FrO : virgule.

7 Ms : pas de point.

8 FrO : virgule.

9 Ms : Monsieur !? — / FrO : Monsieur ?

10 ThC : Oh !

11 FrO : virgule.

12 Ms : blotie (sic)

13 Ms : pas de point. / Épr : point ajouté.

LE GRAND-PÈRE

Ne la tourmente pas. Laisse-la¹, cher Horace.
Il est déjà très tard, et je crois qu'elle est lasse.

LUCILE

*brusquement, tandis que la servante a apporté le thé² et que Marthe,
 dans le fond de la scène, l'apprête*

Qu'est-ce que vous m'avez rapporté de là-bas ?

LE GRAND-PÈRE

La petite effrontée ! On croit qu'elle est timide...

HORACE

Demain,³ j'espère, arriveront mes malles.

LUCILE

Ô ! nous⁴ les ouvrirons ensemble, n'est-ce pas ?

Ils se reculent un peu.⁵

MARTHE

à la bonne qui l'aidait

C'est bien, Rose ! Vous⁶ pouvez vous coucher. Il est tard.

HORACE

à demi-voix

À chaque objet je vous conterai⁷ son histoire...

la⁸ musique couvre parfois la voix⁹

J'ai rapporté pour vous dans une étroite¹⁰ cage

Un petit¹¹ écureuil des îles jaune et¹² noir...

1 *Ms : pas de point.*

2 *Ms : tiret.*

3 *Ms : pas de virgule.*

4 *FrO : Oh ! Nous / ThC : Oh ! nous*

5 *Ms : minuscule et pas de point. / Épr : point ajouté.*

6 *Ms : minuscule.*

7 *Ms, FrO : raconterai / Épr : [ra]conterai*

8 *FrO : majuscule. / Épr : [L] <l>a*

9 *FrO : point. / Épr : point ajouté, puis biffé.*

10 *Ms, FrO : petite / Épr : [petite] <étroite>*

11 *Ms, FrO : Un / Épr : Un <petit>*

12 *Ms : îles — Il est tout / FrO : îles — il est tout / Épr : îles[. — Il est tout] [<,>] <jaune et>*

MARTHE

Venez prendre le thé.

LUCILE

Quand pourrai-je le voir ?¹

Où l'avez-vous laissé ?...

LE GRAND-PÈRE

Allons, venez.² Venez !

*FIN DU PREMIER ACTE*³

*La toile tombe au moment
où ils se disposent
autour de la table
de thé.*⁴

1 *Ms, FrO* : Que je voudrais le voir ! / *Épr* : [Que je voudrais] <Quand pourrais-je>
le voir [!]<?>

2 *FrO* : virgule et minuscule.

1 *FrO, ThC* : ligne absente.

2 *FrO* : (pas de didascalie) RIDEAU / *ThC* : (alinéa) RIDEAU